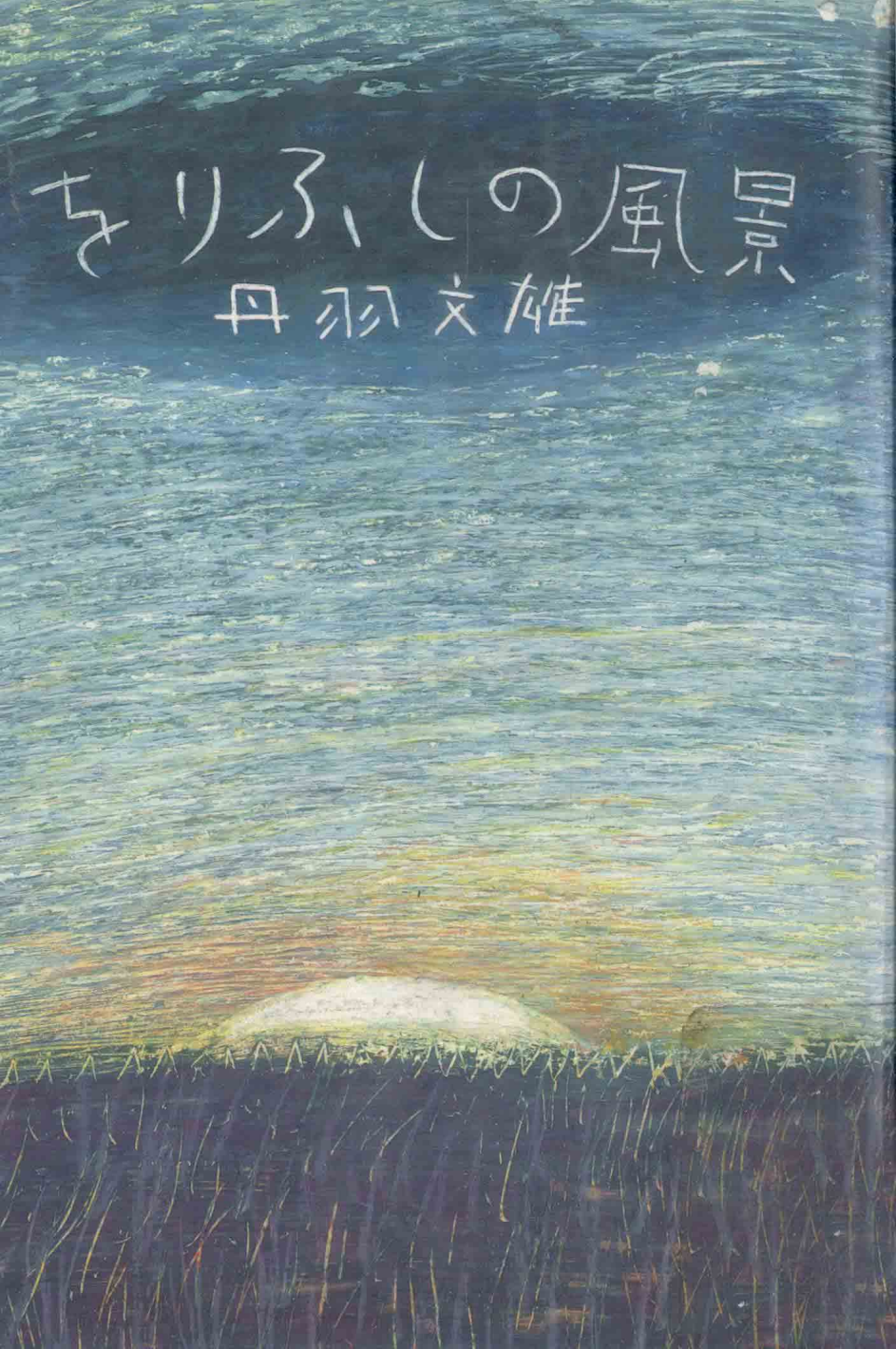


ちりふしの風景

丹羽文雄



をりふしの風景

羽文雄

三
子
塾
書
林

をりふしの風景

昭和六十三年八月二十日初版発行

定価 一五〇〇円

著者 丹羽 文雄

発行者 和田 員枝

発行所 株式会社學藝書林

東京都中央区八丁堀二―三―五

郵便番号 一〇四

電話 東京(〇三)五五二―五九〇六

振替 東京三―一〇八二―番

印刷・製本 東洋印刷株式会社

丹羽 文雄 (にわ・ふみお)

明治37年三重県生まれ。早稲田大学

国文科卒。

野間文芸賞、毎日芸術賞、読売文学

賞等を受賞。

『鮎』『厭がらせの年齢』『一路』『親

鸞』『蓮如』など著書多数。

文化勲章受賞。芸術院会員。

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社まで送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN 4-905640-30-X C0085 ¥ 1500E

目次

I

懷郷の伊勢路を往く

ふるさと随想

9
19

II

わたしの体験

41

III

作家の年齢

105

作家と健康

110

小説の距離感

114

書齋から

117

仕事机

121

六月の花

125

当時の情

129

右手可憐

134

『樹海』を終えて

137

IV

『厭がらせの年齢』考

143

熟年考

146

お雑煮

156

わが家の正月

157

喜寿の春

161

私の金婚式

164

力を抜く

168

私の肉体

172

クラブ道楽

178

遠い銀座

182

私の草木

188

私と和菓子

192

わが家の漬物

195

日記から

198

文学者とテレビのモデル

210

テレビの誘惑

215

V

志賀さんの思い出

223

辰野先生とゴルフ

228

ゴルフ仲間の小林秀雄

232

小林秀雄君の思い出

237

吉川英治氏をいたむ

244

弔辞拾遺

247

野間さんのこと

254

惟道さんのこと

257

尾崎のこと

259

尾崎一雄のいろいろ

282

尾崎一雄の百日祭

269

VI

親鸞の迷惑

281

わが親鸞、わが蓮如

286

人間蓮如

290

大悲

301

あとがき

305

装幀、装画・さなめやゆき

懷郷の伊勢路を往く

北勢の四日市に生まれた私は、いまだに南の方の木ノ本や尾鷲を知らない。従って三重風土記と題したところで、片手落ちにならざるを得ない。これは、一片の紀行文である。太平洋の荒波をまともにうける南勢には、三重の半面の豪毅な趣きもあるのだろうか。

ひさしぶりに桑名を訪ねた。揖斐川の場所に、三重県立公園という柱が立っている。日本一の短い電車もすでに消えていて、戦後の街は見知らぬ街と変わっている。七里の渡しには、木の香も新しい大鳥居が建っていた。揖斐川の流れは、泉鏡花がこの地を背景に『歌行燈』を書いた時とおなじ流れを続けている。鏡花の文学は女性の魂の永遠の相を捉えていた。七里の渡しもまた日本文学には、永久に残ることであろう。新しい鳥居は、伊勢大神宮の宇治橋のたもとに立っていた鳥居のお下りだが、この鳥居が伊勢神宮第一の鳥居と權威をもっている。神宮の正殿で二十年間つとめあげた木材が、次の二十年間宇治橋のたもとに立ち、それがまたお下りとなって桑名

の七里の渡しの大鳥居と三変するのである。一本の木が六十年間も使用されるわけである。七里の渡しの界限には、木の香も新しい料亭が続々建てられている。

桑名から自動車で富田にはいる。昔の三重県立第二中学——富田中学——現在の四日市高校には、なつかしい田村左衛士校長（田村泰次郎君の父君）の胸像があるはずだと捜したが、戦時中に供出されたものらしい。生徒に尋ねても誰も知らなかった。校舎も変わっている。わずかに生徒控室と大きな井戸だけが記憶をとどめていた。その井戸の前で、老人の靴屋が店を開いていたものである。控室の軒下に五年生がめじろ押しに居並んでいる前を、登校する下級生が一人のこらず脱帽して通った昔を思い出した。四日市高校生は私の作詞の応援歌を唄っているはずである。校内に売店があつて、毛布や日用品を販売しているのを見て、世知辛くなったものだと思つた。

「だいのおだまき」は中学生の私にとっては忘れることの出来ないおやつであつた。現在は、一本松のおだまきと変わっている。一尺近くのおだまきを新聞紙に包んでもらうのである。それを頭からかぶりつく妙味はこたえられなかった。一本で満腹。一本七錢であつた。現在では運ちゃんのお腹ごしらえに應用されているらしい。あいにく休業だったのは残念である。富田浜を歩いた。私の小説によく出てくる松並木は昔と変わりがなかったが、まるで湖のように穏やかな伊勢の海があつた。霞ヶ浦や四日市港が意外に近くに眺められた。海がせばまったようである。富田の浜辺を多感な胸を抱いて、よく歩いたものである。遠くに知多半島が霞んでいた。

四日市へは、戦後三度目の訪問である。ここが昔の比丘尼町だと言われても、トラックの疾走する広い道路になっているのでは、昔を思い出しようがない。小学校からの友達の杉村信造君を川村組の万古焼工場に訪ねる。陶土にまみれて杉村の信ちゃん、十年一日の如く働いている。その夕方、私達は湯の山温泉に向かった。中学生時代、喉の喝きをうるおしたその宿の休憩所は昔の面影を失っていて、あたりの樹木が切り倒されていたのは淋しかった。昔の湯の山はもっと幽寂な感じであり、深山を思わせたものだったが、現在では麓に別荘が建ち並び、面目を一新している。山全体が変貌するのもやむを得ないのだろう。小箱根の異名もなつかしい。避暑地だけに、宿の畳の冷たさには驚いた。ここは鉱泉をわかすのである。宿から名古屋の灯が見えた。宿の赤かぶらのぬか漬けが、大変おいしかった。

四日市倉庫株式会社には旧友の伊藤吉兵衛君が常務監査役をやっているので訪ねると、受付に美人がいた。さっそくカメラにおさまってもらう。四日市には推薦すべき美人が一人もいないとなれば、私の面目失墜になると心配していたのだが、たすかった。佃田あき子嬢である。社長の榎並起夫さんに港を案内してもらったが、茂加の松並木は消えていて、日本第六位の貿易港として生まれかわった四日市港の姿には目をまるくした。先日の石油会社の大火事で有名になった四日市港だが、あれは港のわずかな一部分の出来事にすぎなかった。「松の鮎」で、昔の味覚を思い出した。あまい鮎である。まぐろだけは東京に限るのだが、その他の鮎は絶対に関西がおいしい

というのが私の持論である。

一身田高田派総本山専修寺へは、戦後二度目の訪問である。八歳の時得度式を挙げた本堂で端座した私は、感慨無量であった。権中僧都の坊主の子供は、ろくにお経がよめず、内陣の神秘と荘厳さに圧倒されたものである。現在の年齢になって、改めて本堂に端座してみると、漸くこれからの自分が本当に親鸞と向き合えるようになるという気が強くなった。境内で少年が風船玉をとばして、空気銃で撃っているのを見て、悲しくなった。

松阪の旧城内に移転した本居宣長の書齋を訪ねたが、時間がおそくて、格子の外からしか見ることが出来なかった。古事記伝の版木が棚に重ねられている。松阪は戦災をうけていない。城下町らしい面影が残されているのは、うれしいことである。松阪肉で有名な「和田金」を訪ねる。昔ながらの古びた六疊におおされて、松阪肉を味わった。牛にビールをのませて、食欲を増進させるということを聞いた。七十歳の主人の和田茂さんは、つやつやした肌をしていて、六十歳位にししか見えない。しょっちゅう牛肉を食べているからだと言うが、女中さんに君達もしょっちゅう肉を食べているのかと聞くと、肉はたくさんだと答えた。毎日客のたべる肉を世話しているせいだろう。和田茂さんが、ヒレとバラの肉を土産にくれた。その隣りで、「老伴」^{おいづこ}を買う。松阪といえど、「和田金」の肉と「老伴」を思い出す癖がついている。三番目に本居宣長を思い出すのだが、よほど食い意地が張っているものらしい。

湯の山の宿から山田の朝日館に電話をかけておいてもらったのだが、私のいう宿は、二見浦の朝日館なので、とんだまちがいが生じた。山田の朝日館では、わざわざ駅まで出迎えてくれたそうである。電車が宇治山田に近付くと、いたるところの田圃の畔にはみごとに大根が冬の陽に白い肌をさらしていた。大根の重みで、支えの棒が折れているのもあった。私達はすぐ、二見浦に向かった。二年前、古市の油屋に宿を申し込んだところ、爆撃で油屋だけが燃えてしまっていた。由緒のある油屋だけを燃やしたのはどういう魂胆だったのか。まさかそこまでの計画はなかったであろうが、残念である。

「和田金」で土産にもらった肉で、さっそく料理をしてもらう。夜明けから雨になった。私は、雨男の異名をとっている。必ず雨にめぐり合うのだが、私と旅行をする人はレインコートの支度が要るといわれている。やはり雨かと、波の音の中に雨を聞き、がっかりすると同時にホッとする気持ちもあった。

翌朝、雨はつづいていたが、小雨である。宇治橋で車をすてて、細い雨の中を歩き出した。新しい農相が緊張した表情で内宮の参拝を終えてもどって来るのに出会った。議会で闘士をもって鳴っていた彼も、新農相となれば、伊勢神宮に参拝する気持ちになるものかとちょっとおかしかったが、これは私のあやまりであった。野党の内は伊勢神宮を忘れていてもよいのだが、農相という公人の立場に立てば、伊勢大神宮に報告のため参拝するのは当然のふるまいである。公人と

しての新農相がそうふるまっていることは、感じのよいことであつた。小雨の神宮境内は、また別な趣きがある。雨にけむる神域は、一幅の水墨画である。紫の袴の、白衣の背の高い人に声をかけられた。その人は、これから私達が訪ねていこうとしていた慶光院俊氏であつた。よいところで出会つた。ひと先ず私達は、内宮に参拝した。それから、神楽殿に接した控室に上る。神に奉る火は、すべて古式に従い木をすり合わせてともす火に限られている。その用具が部屋の片隅に置かれていた。先頃の遷宮のため、現在の日本の和洋画家の作品が奉納されたが、それらが現在徴古館に納められているという。神宮禰宜である、賽務課長の慶光院という姓に私は疑いをもち、尋ねると、なかなか由緒のある家柄であることが判つた。戦国時代のあおりをくらつて、伊勢神宮はすっかり荒廃していたのだ。それを同じ伊勢の山田にいた慶光院という禅宗の或る尼僧が、独力で神宮の再建をはかつた。その尼僧の子孫が、現在の慶光院俊氏である。氏のところには、秀吉や淀君の書翰が保存されているという。

それにしても伊勢大神宮だけは、何度来ても最初に感じた幽遠な神秘感がすこしも弱くもならない。古くもならないのは不思議なくらいである。少年の時には、少年の感覚だけでうけとっていたものが、成長してから接すると、びっくりするほど狹隘に、浅く、平凡に見えるものだが、伊勢大神宮だけはそれが無い。終戦以来、私は講演のためにほとんど日本全国を歩いている。六、七十ヶ所で講演をしているだろう。再び訪ねてみたいと思う土地も二、三はあるが、誰にも